



「表の顔」を演じ切る覚悟 ——追悼・海部俊樹

かいふ としき
(1931年1月2日～2022年1月9日)
愛知県名古屋生まれ。1954年早稲田大学卒業、60年衆議院議員に初当選、2009年まで連続16回当選(旧愛知3区、愛知9区)。1974年から三木武夫内閣で内閣官房副長官を務めた後、2度にわたり文部大臣を務めた。89～91年総理大臣。首相退任後は94年に自民党を離党、新進党初代党首などを歴任した。写真は1990年7月9日、ヒューストン・サミットの開会式に臨む海部俊樹首相(右)とブッシュ(父)米大統領。(AFP=時事)

放送大学准教授 白鳥潤一郎

しらとり じゅんいちろう 二〇一三年慶應義塾大学大学院後期博士課程修了。博士(法学)。北海道大学講師、立教大学助教などを経て、一八年より現職。著書に『経済大国』日本の外交』共著書に『平成の宰相たち』『世界の中の日本外交』など。ウェブサイトに「データベース日本外交史」の共同運営も行う。

二〇二二年一月九日、海部俊樹元内閣総理大臣が死去した。首相就任時には五八歳、昭和生まれ初の首相であった。海部も九一歳となっていた。五五年体制下の首相経験者として最後まで残った海部逝去の報に接して、時の流れの速さや時代の移り変わりに改めて感慨を覚えている。

内外に時代が動く中での首相就任であった。

そうした時代でなければ、海部が首相に就任することはなかっただろう。リクルート事件に政界が揺れ、一九八九年夏の参議院選挙で自民党が大敗して単独過半数を失い、

「政治改革」が叫ばれる中で転がり込んできた首相の地位であった。党三役も主要閣僚も経験しておらず、首相を指して積極的に活動してきたわけでもなかった。首相就任前後に東欧革命が始まるなど、国際情勢も冷戦終結前夜の激動期であった。またバブル経済の真っ只中にある、日米貿易摩擦もピークを迎えようとしていた。

確たる党内基盤もなく、当時の自民党最大派閥・経世会(竹下派)によって首相に就けられた海部だが、政権運営がそれなりに安定していたことは忘れられるべきではない。

自らが実権を持たない中で「表の顔」を演じ切り、発足当初から退陣間際まで内閣支持率は五〇%程度を維持し、五五年体制下では高い水準で安定していた。「政治改革」や異例の二国間協議となった日米構造協議など、内外に山積する課題の調整は経世会に委ねつつ、持ち前の明るさを活かして活躍した。

政権発足からわずか二〇日後の訪米では、ジョージ・H・W・ブッシュ大統領と良好な関係を築き、それ以降の頻繁な「ブッシュユホン」は九〇年の新語・流行語大賞にも選ばれた。マーガレット・サッチャー英首相も初対面の様子を「彼は非常に親欧米的で、私が会ったいく人かの日本の政治家のように口数少なく、内向的な型ではまったくなかった」と回顧録で振り返っている。生来の明るい性格や弁舌の巧みさは首脳外交で存分に発揮された。

政治を志し、首相にまでなる人物が平凡であるわけはないが、海部の武器はある種の平凡さにあったのかもしれない。

難しい判断が求められる場面で海部の判断は「日本国民のちょうど真ん中辺を行っていた」と外務省から出向した秘書官が後に語ったように、激動の時代にあつて海部の判断は国民の常識に沿っていた。湾岸危機発生当初は自衛隊

派遣を躊躇した一方で、湾岸戦争終結後には、初の自衛隊海外派遣となる掃海部隊のペルシャ湾派遣を決断する。世論をリードするような思い切った判断はしないものの、画期となる国際安全保障への参画を国民の大きな反発なく実現したことは、海部の隠れた業績の一つである。

湾岸戦争を前に、政権内で判断が分かれる局面で問われたリーダーシップの不足は海部自身も理解していたのだろう。その後は思い切った行動も目立った。

自民党内の政局に翻弄された末の首相退陣後も、海部は「表の顔」を演じ続けた。五五年体制下の仇敵が手を組む自社さ（自民党・社会党・新党さきがけ）連立には、自民党を離党して対抗する首班候補となった。その後結成された新進党の初代党首となりながらも、後に自民党と連立を組み、最終的には復党した。派閥政治が限界に達した中で首相に就任し、政界再編の時代にも顔となった。

海部の政権運営は、内外が激動にある中で一定の安定を日本政治にもたらした。本意ではなかっただろうが、自民党の一党優位体制から連立政権が常態となる時代への橋渡し役であったことは間違いない。外交面でもブッシュ米大統領と信頼を築き、国際安全保障への参画を実現した。

時代に求められる役割を全うした政治家であった。●